

博士學位論文要約

論文題目： 平安期物語における継子譚受容

—孝子説話型の継子譚との比較を中心として—

氏名： 森 あかね

要約：

継子譚は世界的に見られる話型であり、その歴史は長い。代表的な話として真っ先に挙げられるのは、グリムの「灰かぶり」、所謂「シンデレラ」である。この「灰かぶり」に代表される虐げられた境遇にある継娘が、自身の力、また超自然的な援助者によって、幸福な結婚をする、というのは一種のパターンとなっている。「シンデレラ」型は世界的に同様のパターンの話が多数発見されており、古くから分類がなされ、研究が積み重ねられてきた。

日本における現存の最も古い継子譚の組み込み例は、平安期の『落窪物語』、『うつほ物語』といった物語である。この他にも多数の散逸した継子物語が存在し、一種の流行となっていたことが推察されている。それ故に、平安期物語における継子譚受容は、一つの研究視点として、その成果が積み重ねられてきた。継子譚という話型は、折口信夫の貴種流離譚から派生したものであるとして捉えられるのが現在の一般的見解である。多くの先行研究において継子譚を日本古来の型として捉え、貴種流離譚、通過儀礼等の関係において論じてきた。その際に中心となってきたのは、女の継子の話、所謂「シンデレラ」型の継子譚である。「シンデレラ」型の継子譚を、それぞれの物語と比較することで、作品の分析がなされてきた。多くの先行研究において、継子譚と言えば「シンデレラ」型を指すという認識も強く、「シンデレラ」型を基本型として据える比較によって、重ならない部分は「変型」として評価される傾向にあった。これらの中では、性別の違いも「変型」として指摘する論も多数見受けられてきた。

一方で継子譚分析におけるもう一つの視点として、大陸伝来の継子譚からの影響とする視点が挙げられる。対象となる物語が作り出された平安撰関期は、未だに「家」が未発達な段階であった。この時期においては、婚姻形態・養育形態の都合上、継母が継子をいじめるといった問題は表面化しにくかったとされている。つまり、継子譚で語られる状況は現実世界ではほとんど実現しにくいものだったのである。創作物と現実世界の乖離は起こりうることであるが、平安期の物語においては「継母は継子をいじめもの」という、一種の共通認識が作り上げられており、背景の説明がなされていないものも多い。このことから考えると、これらの物語の前にその土台となる話が広く人々の中で享受されており、共通認識が作り上げられたという可能性が見えてくる。具体的には、既に「家」が成立し、そこに付随する問題として継子いじめを語った中国・インドの継子譚が日本に伝来することで、平安期物語への作用が起きたとする視点である。実際に大陸から伝来した継子譚は、

平安期に編纂された説話集に数多く記録され、注釈書等の記述にも引用されている。これらから、人々の間で大陸伝来の継子譚が広く共有されていたことが推測することができる。この大陸伝来の継子譚は、ほとんどが継子は男の話である。その中でも特に注目したいのは継子が継母の迫害を受けてもなお継子に仕えるという、孝子を讃えることを目的とした孝子説話の中に含まれるものである。この孝子説話の中に含まれる継子譚は、一種のパターンとして認定することができるが、これまで中心となってきた「シンデレラ」型とは全く異なっている形式をとっている（便宜上、本稿ではこのパターンの継子譚を孝子説話型と呼んでいる）。これまで日本の作品においても、男の継子譚は「シンデレラ」型の「変型」として評価されることが多かったが、男の継子の話は、『今昔物語集』『亀報山陰中納言恩語』（巻19第29話）・「陸奥国府官大夫介子語」（巻26第5話）、『うつほ物語』の忠こそ、『源氏物語』の光源氏の例が存在している。これらのことを考えると、「シンデレラ」型だけでは、平安期物語における継子譚を捉えることができないのではないかという疑問が生じてくるだろう。継子譚の発生源の問題は別にしても、大陸伝来の継子譚と平安期物語を比較し、物語を作り上げる表現の問題として分析する方法は有効ではないだろうか。特に孝子説話型の継子譚の元となる孝子説話は、日本において漢詩文、和歌等、様々なジャンルに取り込まれたという歴史がある。古代中国を模倣し、国家統治理念として認識されてきた孝の受容を鑑みても、また現存する孝子説話型の継子譚の用例数から見ても、注目に値するパターンであると言えよう。

そこで、本稿は大陸伝来の継子譚、特に中国の継子譚である孝子説話型の継子譚を中心として、平安期の物語における表現を支える一つの素材としての関わりを検討することを目的とする。『落窪物語』、『うつほ物語』、『源氏物語』と、継子譚が組み込まれた現存する平安期物語を取り上げ、物語の方法を新たな視点から再検討していく。継子譚という繰り返し引用されてきた物語素材に注目することで、それぞれの物語における素材の組み込みや物語への機能を考察することで、物語表現の生成過程における一面を明らかにすることへと繋げていきたい。短編物語、長編物語の両方に組み込まれている素材である継子譚という切り口は、物語の特質を比較し、生成過程を探るための指標となり得るだろう。

本稿は三部構成である。第一部「物語表現としての継子いじめ」では、平安期物語に見られる人間関係の実態を越えた継子いじめの共通認識と、大陸伝来の継子譚の関係について論じた。第一章「平安期物語における「継子」「継母」「継父」「継女」の使用実態」では、平安期物語に見られる「継子」「継母」「継父」「継女」の用例を分析、分類し、その使用方法について考察した。これらの語において、継子いじめという強い固定観念が付随しており、その上での使用方法について明らかにした。第二章「平安期物語の継子譚展開—孝子説話型の継子譚との関わり—」では、改めて日本の継子譚発生に関する先行研究を整理し、孝子説話が日本で受容されていく様を追い、平安期の物語が孝子説話型の継子譚を素材として取り込む道筋を表現の面から探求した。孝子説話が政治知識を始発とし、文学知識となり共有されていくことで、継子譚の展開は支えられたのではないかという道筋を考察した。

第二部「短編から長編物語へ」では、平安期物語において継子譚が素材として受容され、組み込む方法が模索されていく様を論じ、短編の素材が物語に取り込まれ、長編物語に至

る変化を追った。第三章『落窪物語』における孝養—継子いじめとの関わりから—では、『落窪物語』の孝養譚部分を孝子説話型の継子譚との関わりから読み解き、孝が物語に果たす機能を明らかにすることで新たに物語を位置づけた。物語において継子いじめから孝養までの展開は一連の流れとして結びついており、孝養譚の展開は孝子説話型の継子譚における孝要素から導かれたことを明らかにした。第四章『落窪物語』北の方における継母造形—継子譚における迫害行為—では、『落窪物語』の北の方の造形を、先行する継子譚における継母の迫害行為と比較し、先行継子譚を越えようとする『落窪物語』の方法を考察した。全体の連なりへの意識、複数の素材を組み合わせる方法、新たな造形を追及する方からは、継子譚による物語から離脱し、長編物語へ至る道筋として位置付けた。第五章『うつほ物語』忠こそ物語における長編への方法—では、『うつほ物語』忠こそ物語と、孝子説話型の継子譚である「伯奇」譚との比較を起点とし、その素材の組み込み方法と長編物語独自の方法を考察した。「伯奇」譚を基本構想としながらもそのみに縛られることなく、物語全体に連なる『うつほ物語』の方法を明らかにした。

第三部『源氏物語』と継子譚—では、第一部、第二部を受け、継子譚の「変型」が特徴とされた『源氏物語』を、新たな視点から再検討した。光源氏と紫の上の物語を対象として、継子譚組み込み方法と機能について考察した。第六章「継息子の物語としての光源氏の物語—弘徽殿女御との関係を中心に—」では継女の物語と比較により検討されてきた光源氏の物語を、大陸伝来の継子譚との比較により継息子の物語として据え直した。その上で、第七章「光源氏の物語と舜譚—孝思想との関わりから—」において、孝子説話型の継子譚の代表例である舜譚との展開比較を通し、孝子説話型の継子譚、孝思想と物語の関係について考察した。孝子説話型の継子譚が、『源氏物語』という大きな物語を動かす素材として機能している様子を明らかにした。第八章「紫の上と明石姫君—馬皇后・肅宗型の関係との比較から—」では、継子譚の枠組みで捉えられてきた明石の姫君との関係における紫の上の物語を、「馬皇后」故事を中心として、良好な継母子・養母子関係を語る話との比較によって新たに位置づけ、素材の組み込みが果たす機能について探究した。馬皇后・肅宗型の継母子・養母子関係が取り込まれることで、物語が重層的構造をなし、更なる展開へと接続していくという物語の方法を明らかにした。

これらの手順に随って、『源氏物語』に至るまでの平安期物語における継子譚受容の様相を考察した結果、平安期物語における「継子」「継母」等の語句の背景には、人間関係の実態を越えた継子いじめに対する意識が付随しており、大陸伝来の継子譚がその共通認識の形成に寄与することとなり、「シンデレラ」型だけでなく孝子説話型の継子譚も、物語の表現の中に取り入れられ、物語全体に機能していることを明らかにした。

『落窪物語』では、巻四における孝養譚が、孝子説話型の継子譚において主題となる孝によって作り上げられ、一連の継子いじめ物語の決着部分として機能している。その際には元の素材は拡大され、物語に組み込まれている。しかし、その一方で新たな素材を組み合わせることで、先行する継子譚の枠組みを越えようとする試みも見受けられる。継子譚と重なりを見せながらも、それとは異なる素材との接続を果たしている。これは『うつほ物語』における、孝子説話型の継子譚を取り込みつつも、全体を貫く主題によって素材を改変する方法に繋がるものがある。一つの短編素材が大きな流れの中に組み込まれ、長

編物語の一部へと成長していく過程を見ることができる。

これまでの先行研究において『源氏物語』と継子譚の関係は、「変型」の方法に注目されてきた。だが、それは「シンデレラ」型との比較によるものであった。孝子説話型の継子譚、また良好な関係を築く馬皇后・肅宗型の継母子関係という先行する素材の視点を取り入れることで、一つの素材が別の素材と重ねられ、全体を貫く流れの一部として組み込んでいくという新たな物語の方法が浮きあがってくる。ここに長編物語としての『源氏物語』の特徴を見出せるのであるが、この特徴は『源氏物語』が創出したのではなく、先行する物語素材、先行物語における方法の積み重ねによって、たどり着いたものであると言える。つまり、元の素材の改変という意味での、所謂「変型」は、『落窪物語』から既に見受けられるのである。三つの物語の分析を通すことで、一つの短編素材が大きな流れの中に組み込まれ、別の素材と繋ぎ合わせ、重ね合わせられながら長編物語へと成長していく過程として見ることができるのである。継子譚の関係における特徴として位置づけるのではなく、素材の組み込み方法の成長を見出し、長編物語としての『源氏物語』が至った境地として位置づけるべきだろう。

継子譚は物語表現を支える一側面ではあるが、確かに平安期物語の一部として機能している。本稿によって提示した新たな視点によって、継子譚の分析は新たな問題へと連鎖する可能性を秘めていると言えよう。本稿で考察の中心となった孝子説話型の孝は、従来捉えられてきた以上に古代日本文学と結びつき、表現を支えるものとして機能し、継承されている。すでに中世文学研究の成果の一つとして、御伽草紙で語られる継子譚における孝の結びつきを指摘されている。平安期の物語における継子譚と孝の関係が明らかになったことで、これらの鎌倉期の継子譚の成果との接続が期待できると考えている。後の時代を含め、広い範囲でその繋がりを見出すことができ、多大な可能性を秘めているといえよう。

主要な参考文献

山室静『世界のシンデレラ物語』（新潮社 1979年）

日向一雅『源氏物語の王権と流離』（新典社 1989年）

高木和子「継子いじめ—『源氏物語』における継子譚の位相」（増田繁夫、鈴木日出男、伊井春樹編『源氏物語研究集成⑧』風間書房 2001年）

関敬吾「婚姻譚としての住吉物語—物語文学と昔話—」（『国語と国文学』39—10号 1962年10月）

三木雅博「〈継子いじめ〉の物語と中国文学—『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために—」（『国文学 解釈と教材の研究』50—4号 2005年4月）